

瑞々しいエネルギーの燃焼

石川耕士

三代目市川猿之助の後援会「おもだか会」にお入りになっていた方はご存知と思いますが、おもだか会の会報誌が年刊になってから、演目によつては初演と再演の台本を掲載し、どこが違うか、どう変わったかという記録を非常に詳細に残しておられました。

先ほど企画者である田口章子教授と話をしていたのですが、そういうものが残っていると将来、研究をするときに大変役に立つのですね。たとえば小説家ですと下書きが残っているのですが、実際の本になったものとどう違うかなどの研究ができますが、どうしてもお芝居の場合は結果オーライで、作品づくりのプロセスや、再演時の変更点などはあまり気にしない方が多いと思うんです。ですが猿翁さんは、そういったことの記録を非常にきっちり残す方でした。しかも多くの資料やビデオなどの映像も残されているので、100年、200年先の人が猿翁さんについて研究しようとしたとき、猿翁さんの意図や考え方まで全部、調べることができるんです。学問として取り上げるに最も値する俳優だと思っています。ですから先ほどの市川團子さんの『ヤマトタケル』の比較論をおじい様は「いい講演だった!」と喜んでいらつしやると思います。

今回も「猿翁アーカイブ」の中から映像を観ていただこうと思いますが、最近、歌舞伎は上演演目の並び方が乱れていますので、今回は時代物、中幕の踊り、世話物という基本的な順番でご紹介していきたいと思っています。

まずは時代物の中から『源平布引滝』の「実盛物語」をご覧ください。

【映像】

これは平成3（1991）年の12月にこの京都の南座で行われた顔見世のときのものです。猿翁さん扮する斎藤別当実盛が太郎吉の鼻水を拭いてあげるあたりからご覧ください。子役の太郎吉は歌舞伎の家のお子さんではなく、普通の家の子役さんです。百姓九郎助は六代目片岡芦燕さんです。芦燕さんは猿翁さんの一座によく出演していらつしました。葵御前は市川笑也さん、九郎助女房小よしは五代目坂東竹三郎さんです。

先ほどから出演者全員、義太夫三味線の伴奏に乗ってリズムカルに台詞をいう「ノリ」で進めています。こんなに皆がノリでしゃべる芝居もありないと思います。竹本は豊澤重松さんと竹本葵太夫さんのレギュラーコンビです。

このシーンは実盛が乗っている馬に太郎吉も乗りたそうなので、じゃあ乗せてあげようということです。乗せる近習の役は、近習の中で一番背の高い坂東彌十郎さんがやることになりました（笑）。

【映像】 実盛が馬に乗り、扇をかざしながら舞台を一周する

ここの義太夫は普通、三味線だけで語りは入らないんですが、猿翁さんの場合は「染手綱」という文句が入ります。今回のパンフレットに上演年表が掲載されておりますが、それを見るとこの後、平成5（1993）年に歌舞伎座でやっておられます。お好きな役だったので何年かおきに上演されていることがわかりますね。猿翁さんはこの役を坂東玉三郎さんの養父である十四代目守田勘彌さんから習いました。勘彌さんは十五代目市村羽左衛門さんの方の系統なので、音羽屋系の実盛とは少し違っております。「染手綱」もその一例です。

【映像】 斎藤別当実盛「堅固で暮らせよ」

馬の上で見得を切って舞台上は幕が引かれる

この芝居は馬役も大変、重要です。少し行き過ぎておいてバックで七三に戻ってくる。こういうことができる馬の役者さんも少なくなってきました。馬が出る場面では今、ご覧いただいたように急に馬が動かなくなってしまうというシチュエーションが必ずあります。覚えておいてくださいね。

【映像】 実盛は馬に乗って花道に入る

南座は揚幕が低いので入るときが大変です。ぐっと下がって、一気に入らないといけません。

続きまして舞踊の『奴道成寺』をご覧ください。これは猿翁さんの当たり役で、年表を見ていただくとわかるように今回、お見せする映像の中で最も上演回数が多く、336回もなっています。本日はそのうち最後に上演した平成11（1999）年7月の歌舞伎座の映像を観ていただきます。

これは、クドキの「恋の手習い」を三つのお面をかぶって行うのが趣向ですが、長いので今日は前のほうを省略して、お多福（遊女）からお大尽のお面になるあたりから見ていただきます。後見の市川寿猿さんとの息の合わせかたが重要でして、そこもぜひご覧いただきたいと思います。

【映像】 満開の桜の中、上手に鐘。正面に長唄囃子連中が並び、下手には常磐津の山台。中央の猿翁が後ろを向いて

お大尽のお面に変える

ここから常磐津に変わります。声が長唄と違って渋いので、今どちらなのかわかりやすいと思います。へ末はこうやにナのところは、『娘道成寺』ですと指と指を絡める男女の関係を見せる振りなのですが、ここでは手拭いを杖のようにして、年寄りを見せる振りになっています。これは特別な形としてあるようでして、亡くなった五代目中村富十郎さんも『娘道成寺』のへ末はこうやにナのところで杖を突く振りをなさっていました。中村富十郎家は古くから『娘道成寺』が当たり役のお家ですから、古い型なんだと思います。

【映像】 お大尽からお多福の面に変える

とにかく三つ面というのは顔の表情が見えませんが、体を使って遊女とお大尽と太鼓持ちを演じ分けなくてはなりません。しかも狂言師の衣裳ですので非常に立派な織物の袴をはいています。その姿で、それぞれの役を見せなくてはいけないのもとても難しいですね。ここではぜひ体の線をご覧になってください。

面を替える頻度が多くなって、この辺は中締め（中締め）の盛り上がりどころです。その後でひょっとこのお面を付けると太鼓持ちになり、遊女とお大尽の間を仲介します。ここが一番、滑稽なところですね。そして最後にお面を三つ手に持ち素顔を見せることで、お客様にアピールするのです。

【映像】 三つ面でキマリ、一度、引込み、再び花四天と共に登場

ここからは花四天を相手に鞆鼓の振りをします。

【映像】 花四天とカラむ

猿翁さんは還暦目前に、21世紀の終わりということもあり、新たに「第二次春秋会」を始められました。その趣旨は、今まで苦手だったり、好きではなかったりした役を演じてみるということで、その第一回に『京鹿子娘道成寺』を踊られました。『娘道成寺』は真女形が踊ることの多い踊りですし、特に踊りたいほど好きではないとおっしゃっていました。まあ、これだけショーアップされた『奴道成寺』を何回も踊っていらっしゃったら、別に今更『京鹿子娘道成寺』を踊らなくてもね、と思っておられたのも無理もないと思います。鞆鼓は一番難しいといわれるくもりですが、ここに花四天をカラませているので更に派手で、観ていても楽しいです。

去年のこのシンポジウムで『双面道成寺』をお見せしましたが、『奴道成寺』には『双面道成寺』と非常に共通点があるということがわかりになると思います。

今、ご覧いただいている鞆鼓で踊る「山尽くし」の場面では、いろんな山を表現しますが、ここから稲荷山で「狐」の振になります。何といっても狐はお手のものですよ。

【映像】 「狐」の振りをし、海老反りになる。花四天がカラんで振り鼓を受け取る

振り鼓になった瞬間、ブツ返って赤い衣裳になります。振り鼓は『娘道成寺』で女形さんが踊っても体をいっぱい使って躍動的に踊らないといけません。この「弓張り」という、弓を引く振りもなるべくダイナミックに動くほう

が効果的です。しかも『奴道成寺』は立ち役の踊りですから大きく動いてもいいわけです。

【映像】 一列になった花四天を上手から下手に順番に返し、下手で花四天の一人を踏まえてキマル

今のところは『京鹿子娘道成寺』のようにすぐに鐘の上手から回り込んでいいわけですが、花四天を返して踏んで鐘を見込み、もう一度、一人ずつ縫うように上手へ歩んでいきます。こういうところに古風な振りが残っていると思います。

【映像】 上手に猿翁、下手に花四天が一列に並ぶ。鐘が降り猿翁が入り、花四天が鐘を囲む

鐘の上で鱗模様の衣裳になって綱に手をかけて見得を切る

『娘道成寺』ですと上から被せた衣裳を取って鱗模様を見せるだけですが、『奴道成寺』ではブツかえって手に宝物を持ちます。宝物を持つのは花柳流の『奴道成寺』の特徴です。猿翁さんのお爺様の二代目猿之助（初代・猿翁）さんは花柳流ですが、猿翁さんは藤間宗家の六代目藤間勘十郎さんに踊りを習ったので「ぼくの踊りは花柳流と藤間流を折衷した振りになってんだ」とよくおっしゃっていました。

これを猿翁さんが初めておやりになったのは19歳のときの昭和34（1959）年1月、新宿の第一劇場でした。ご覧のように『奴道成寺』は所化（修行中の僧）も出れば花四天も出るので出演者数も多く、長唄と常磐津の掛け合いで演奏者も多い作品です。19歳の若手がやらせてもらうには大作なのですが、その頃、現・松本白鸚（当時・市川染五郎）さんと先日お亡くなりになった二代目中村吉右衛門（当時・中村萬之助）さんと猿翁（当時・市川團子）さんの3人を「十

代歌舞伎」として売り出していた頃なので、やらせてもらえたのだと思います。

後におっしゃっていたのですが、初演のとき、張り切りすぎて振り鼓が飛んでいってしまい、それが悪いことに山台のお囃子さんに当たったのだそうです。それでお囃子さんから「あなたが踊るときは山台の前に網でも張って、こちらに被害が出ないようにしてください」と怒られたとおっしゃっていました(笑)。19歳ですからね。今の團子さんより若いわけですから張り切ってしまったんでしょうね。

それでは続いて世話物をご覧ください。新歌舞伎といわれる近代に作られた作品の中から『一本刀土俵人』をご覧くださいと思います。これは1994回もなさっておられます。昭和48(1973)年の33歳のときから49(1974)年、51(1976)年と坂東玉三郎さんとのコンビでおやりになっています。それから10年ぐらい空いて、その後は七代目中村芝翫さんとおやりになっています。今回は『奴道成寺』と同じ月に芝翫さんとおやりになった映像を観ていただきましょう。

猿翁さんは、「この作品は船屋の太鼓ぐらいしか音がなくて、歌舞伎の『歌』の部分が少ないけど、セリフが歌でなければいけない」とおっしゃっていました。

〈ここまでの簡単なあらすじ〉取手宿の街道筋では嫌われ者の船戸の弥八が暴れています。そこへ通り掛かった取手の駒形茂兵衛(猿翁)が頭突きをくらわせ、弥八を追い払いました。それを宿の二階から見ていた安孫子屋の酌婦・お蔭(中村芝翫)が茂兵衛を呼び止めます。

【映像】 お蔭 ちょいとちょいと。取的さん、お前さんと呼んでいるんだよ。

茂兵衛 わしか。何だね。

お蔭 お前さんどこが悪いんだ。

茂兵衛 おなかさ。

お蔭 食い過ぎたんだね。

茂兵衛 根ッから食わないからいけないのさ

お腹が減って声も出ないというわけです。

【映像】 お蔭に一文なしで腹が空いていると打ち明ける。茂兵衛はお蔭に問われるまま、親方から見込みがないと追出されたことを話す。お蔭は田舎に帰って百姓をすればいいというが、家は焼け、兄弟はいないという。

お蔭 お母さんだけいるんだね。

茂兵衛 ああ居るよ。駒形の上広瀬川が見える処に。

お蔭 なあんだ、家があるんじゃないか。

茂兵衛 なあに、そこはね、お墓さ。

「お母さんがいるよ」といいますが、それはお墓ににいるということですね。この「お墓さあ」といういい方の感じがいいですね。そして母親の墓前で横綱の土俵入りを見せたいという夢を語ります。ホロリときたお蔭は、自分も故郷の「おわら節」を唄います。すると行きかけた茂兵衛が戻ってきました。お腹が減ってスツと立ってられないのと、お相撲さんの仕切りのような感じに少し腰を落として聴いています。やがて立ち去ろうとします。

【映像】 お 薦 ちょっとちょっと、取っさん。

茂兵衛 まだわしは八里余り歩かなくてはならないのだ、行くよ。

八里って32キロですからね。するとお薦が帯の間からありあわせの銭が入った巾着を投げてよこします。続いて自分のかんざし等もしごき帯に結び付けて、2階からくるくると下へと垂らします。「お前さん、大食らいだろうから、これもお金に替えて、たっぷりお腹を満たすんだよ」というわけですよ。

【映像】 茂兵衛 わし、こんな女の人にはじめて逢った。

お 薦 横綱の卵は泣きべそだねえ。早くお取り、人が見るとおかしいよ。

茂兵衛が後ろ姿で泣く様子を見せる

ここは肩の揺れだけで泣いている様子を見せるんです。茂兵衛がお薦に名前を聞きます。

【映像】 お 薦 まだいわなかったね。取手の宿の安孫子屋にいるだるまで名はお薦、越中八尾の生れで二十四に

なる女だとはつきりいつておやり。

茂兵衛 へえ。(記憶するために口の中で繰返していつている)

お 薦 その代り、取っさん、屹とだよ、立派なお角力さんになっておくれね。いいかい。そうしたら、

あたし、どんな都合をしたって一度は、お前さんの土俵入りを見に行くよ。

茂兵衛は恩返しに、必ず出世して横綱になることを誓います。そして自分の四股名は駒形茂兵衛といい、お薦がすぐにわかるように出世しても名を変えずにいると誓い、もう一度、親方の弟子にしてみようために江戸に向かいます。次の幕では、みなさんご存知のように関取になる夢がやぶれて鋭い渡世人になっています。後とのつながりからも、ここで薄ノロのような人に見えてはいけません。フラフラしているのは、ただお腹がすいているだけなんです。人情劇、大衆劇なので、いろんな人が演じますが、なかなか猿翁さんのようにはいけません。キャラクタは違いますが、以前このシンポジウムで観ていただいた真山青果の『江戸絵両国八景』の荒川の佐吉と、この駒形茂兵衛は猿翁さんの新歌舞伎の双壁をなすものですね。猿翁さんという人は本当に茂兵衛のような人で、気配りがあり、ピュアで優しい人なんです。そういうのは作って演じたら嘘になってしまいます。本当の性格が下地にあるからいいんです。

【映像】 茂兵衛が花道に移動する

お薦に「あんまりお酒を飲んじゃいけないよ」と心配して声をかけています。七三でお薦と言葉を交わしてお辞儀をし、また真ん中でお辞儀をし、揚幕に入るギリギリのところまで3回目のお辞儀をします。新歌舞伎ですからリアルに演じながらも、粒立てるところはしっかり立てています。猿翁さんはいつも「新歌舞伎だからといってテレビドラマみたいにナチュラルになつてはいけません。時代物をちゃんとお腹に持った上で、気持ちはリアルにやる。その両方がないといけない」とおっしゃっていました。

ちなみにこの作品の作者である長谷川伸さんは猿翁さんのご両親である三代目段四郎さんと高杉早苗さんの仲人でもあり、猿翁さんの本名・喜熨斗政彦の名づけ親なのです。

これで時代物と踊り、世話物と観ていただきましたが、今度は僕が猿翁さんの作品の中で大好きな『敵討天下茶屋聚』をお見せしたいと思います。元は端敵（実悪より軽い端役の敵役をいう）だった安達元右衛門役ですが、四代目大谷友右衛門が当って以来、すっかり主役になってしまったというものです。昭和62（1987）年、47歳のときに初役でなされたので、上演回数は一番少ない5度（98回）です。

猿翁さん扮する安達元右衛門が酒でしくじり按摩にまで落ちぶれて改心したと思ったら、全く改心しておらず色々悪事を繰り広げるというものです。その芝居がとてもしろいんです。この「貸座敷の場」の後半は、猿翁さんの一人舞台です。時間の関係で次回にタツプリ見ていただくとして、今回は幕切れだけご覧にしようと思います。（ここまで簡単ならすじ）父の仇討ちを志す早瀬伊織・源次郎兄弟と共に、家来の安達元右衛門と弥助兄弟も旅をしています。しかし酒好きな元右衛門は禁酒していたにも関わらず敵方に酒を飲まされて酔っ払い、早瀬兄弟に勘当されます。この場面は早瀬兄弟と伊織の妻・染の井、弥助とが一緒に暮らしている東寺の近くの貸座敷です。

【映像】 夜、元右衛門が屋根から忍び込みます。

寝ているのは中村歌六さん演じる元右衛門の弟・弥助です。兄のことを心配してくれる良い弟です。真っ暗な中で刀を置き、柄杓で水を飲んだ後、刀から柄杓に持ち代えていたことを忘れて刀だと思って柄杓を振り上げたら「あれ？軽い。あ、違う、柄杓だった」と気付きます。弥助を殺害し、家にあつた百両を盗み取った後、帰ってきた早瀬伊織の足を斬ります。伊織は市川門之助さんです。

【映像】 本舞台が幕になり、幕外の元右衛門の芝居になる

伊織が誰かが追いかけてくるのではないかと疑心暗鬼になっています。

【映像】 附け打ちの音と共に不安でめちやくちやに刀を振り回す

誰かと立廻りをしたつもりになっていましたが「あ、誰も刀を押さえてる人はいない」と気付きます。

【映像】 鐘がなり、ゆつくりと引ッ込みを見せる

ここは「送り三重」の三味線でたっぷり見せます。十分、主役となってよさそうな役ですが、書き下ろしのときは端敵なんですね。

【映像】 附け打ちの音と共に走って揚幕へ入る

この後、伊織は足の傷がもとで歩けなくなり、非人という身分に落ちます。元右衛門は敵である東間三郎右衛門に従って伊織を殺そうとします。伊織が東間に返り討ちになって終わるのがこの「天神の森の場」です。猿翁さんも平成10（1998）年12月歌舞伎座で最後にやったときはそこで終わりにしましたが、それ以外の4回はすべて題名通り「敵討ち」の場を付けています。その場面を観ていただきたいと思います。ここでは筋

がどうのこうのというのではなく、猿翁さんのサービス精神をご覧ください。
場所は大阪・住吉神社です。皆さんよくご存知、舞台中央に住吉神社の反橋そはしがあります。追われた元右衛門が橋の向うからやって来ます。そこに鳩の豆売りのおばあちゃんがいて、二人の滑稽なやりとりになります。

【映像】 耳の遠い鳩の豆売りのおばあさん相手のトンチンカンな会話の末に、元右衛門はおばあさんから半纏を剥ぎ、それを着る

おばあさんは名物役者の六代目嵐冠十郎さん。今の市川猿三郎さんのお父さんです。どんな役でもおもしろく見せてくれる人でしたね。猿三郎さんは若いときから非常に二枚目で、お父さんに似ていなかったですね（笑）。

そこへ市川寿猿さんの奴腕助が元右衛門を追ってやってきます。腕助はかつて東間三郎右衛門の家来で悪人側でしたが、今は改心して善人側になっています。続いて坂東彌十郎さんの乞食頭伝吉がやってきます。この役は普通だと「天神の森」だけに出るただの年寄りの非人頭ですが、この芝居では善人側に味方をする役で年齢も若くなっています。

【映像】 伝吉がおばあさんに扮した安達元右衛門を覗き込む

顔を覗き込まれると困るので除けながら一回転します。

【映像】 伝吉が元右衛門のかぶっている手ぬぐいをとる。元右衛門だとわかり捕まえようと襲いかかる

伝吉は石灯籠に頭をぶつけて倒れ、元右衛門は逃げようと思いますが、向こうから奴腕助が来る。こっちは伝吉がいるので、間に挟まれてしまいます。ここで演奏されている黒御簾音楽は『鈴ヶ森』で雲助と飛脚のコミカルな場面（三すくみ）で使う曲です。元右衛門が絵馬堂の柱を登り欄間らんまに隠れました。絵馬に描かれた馬の形を覚えておいてください。元右衛門が消えたので伝吉と腕助が探しています。

【映像】 元右衛門は絵馬の後ろに隠れている。しかし絵馬が落ちて姿が見えてしまう

隠れていた絵馬がなくなったので、あわてて絵馬に描かれていた馬のポーズをします（笑）。

【映像】 それに気が付いた伝吉と腕助が元右衛門を捕まえようとし、滑稽なやりとりが続く

バカバカしいことばかりやっているんですね（笑）。へ赤いものにとりてはという赤尽くしの唄に乗せ、韋駄天という附け打ちの音で花道まで3人で行きます。途中でくたびれてフラフラしたりしていますね（笑）。元右衛門はいつの間にか花道から客席へ逃げます。元右衛門がお客様に助けを求めています。猿翁さんはご自身の熱烈なファンの人に平気で「今日、2枚切符買って1席空けといて」なんて頼んじゃうんです。そして、そこに座っちゃうんですよ。でも猿翁さんのためなら平気でキップを余分に買って協力してくれるお客さんがいたんですね。

【映像】 3人で客席いじりをする

伝 吉 今日のお客は元右衛門の味方らしいぜ！（客席、拍手）

お客さんが「あそこにいるよ」と教えてくれたり、猿翁さんがお客さんのショールを取り上げてかぶって隠れたりしています。と思ったら中通路から「ちょっと失礼します」と棧敷に飛び乗り欄干渡りをしています。一番前から飛び降りて付け打ちさんのところへ行って、自分で付けを打っちゃっていますね。これにのせられて彌十郎さんが見得を切っています。ストーリーとしては全く意味がないお遊びですが、客席は大喜びです。やつと3人が本舞台に戻って来ました。そこへやってきた神主さんと巫女さんにぶつかると、厩舎から神馬が飛び出してきます。元右衛門はその神馬に飛び乗り、奉納の大根を持って花道へ行きます。ここで流れているのは十日戎とうかえびすという唄で、大阪のお座敷唄ですね。

【映像】 馬が音楽に合わせて足踏みをする

先ほどの実盛と同じく、途中で馬が動かなくなり、手に持っている大根で馬のお尻を叩くと、急に走り出します。元右衛門が馬から飛び降り、隠しておいた刀で伝吉と腕助を切ります。すると市川右近（現・右團次）さんの早瀬源次郎、市川笑也さんの源次郎許婚・葉末、市川笑三郎さんの伊織妻・染の井が現れ、楽屋落ちのセリフなど散々命乞いをジタバタした挙句、3人に切られて、大敵きのようにタツプリ断末魔の芝居をしておきながら、コロツと死んでしまいます。そして皆がいなくなり、死んだ元右衛門だけを1人残し、舞台が回って次の場へ行きます。そして捌き役の片岡造酒頭みさのくみに替わって大詰の幕を切るわけです。

猿翁さんは小学生のとき（昭和26年12月、歌舞伎座）に、おじい様（初代猿翁）がやったこの作品を観て大

変おもしろく思い、翌年3月に、通っていらした番町小学校の卒業式の謝恩会でこの敵討ちの場面の趣向を取り入れた『アリババと40人の盗賊』という作品の台本と演出をされたそうです。それが猿翁さんの初演出だったということです。そういう思い出がある作品ですが、原典の『天下茶屋』をはじめ手がけられたのは47歳になった昭和62（1987）年4月明治座のことだったのです。

今回は僕があればこれ申すよりも、なるべく沢山の映像を観ていただこうと思い、4つの作品をいつもより長くご覧いただきました。

猿翁さんはスーパースター歌舞伎に外部から参加するアンサンブルの人などに、いつも「歌舞伎とは？」というスピーチをなさるのです。僕なんかは「歌と舞と技があるものだ」とか「古典、伝統」などというのが答えかと思ったら、猿翁さんは「歌舞伎とは、瑞々しいエネルギーの燃焼です！」っていわれるんです。最初にそれを聞いたとき、ちょっと不思議に思いました。瑞々しいエネルギーの燃焼が必要というのは、特に歌舞伎に限らずどの芝居にも当てはまるものです。それを「歌舞伎とは」と歌舞伎の最も大きな要素のようにいわれるのはおかしいのではないかなと思います。しかし恥ずかしながら最近になって、やつとその意味がわかるような気がしてきました。

普通の芝居なら瑞々しいエネルギーの燃焼がなかったら観ていられません。ところが歌舞伎は型がありますし、江戸時代からの伝統もあるので、失礼ない方だけれど形骸だけ見せても一見、成り立つんです。形骸だけでやっているのを観ても、お客様に「歌舞伎って綺麗」とか「素敵」「おもしろい」と思ってもらえるかもしれない。でも、それではいけないんだよと。形骸だけでも見せられるからこそ、歌舞伎というのは演者の中に瑞々しいエネルギーの燃焼がなかったら、それは単に形だけの魅力になってしまい、お客様の感動を誘うことはできない。それがおっしゃりたかったんだらうかと、近頃思うようになりました。